

聖学院大学総合研究所 カウンセリング研究主催  
 2019年度 キリスト教カウンセリング研究講演会  
 「二人の心理臨床家が語る闘病とメンタルヘルス」  
 講演：瀧口俊子・藤掛明



講演者：瀧口俊子先生

2020年2月20日（木）、聖学院大学ヴェリタス館教授会室にて「2019年度キリスト教カウンセリング研究講演会」が行われた。堀肇先生（聖学院大学総合研究所特別研究員）の司会で始まり、瀧口俊子先生（放送大学名誉教授）と藤掛明先生（聖学院大学心理福祉学部心理福祉学科教授）のお二人が、「二人の心理臨床家が語る闘病とメンタルヘルス」というテーマで登壇された。学内外から、38名の参加者があった。

講演会は、両先生のお話から始まった。「闘病とメンタルヘルス」という題であったが、それよりも、2人の臨床家が「自分の人生の物語を語る」という内容が色濃いお話であった。お二人の人生は、中高生のころにキリスト教と出会い、大学時代に心理学を学んでそれを仕事とし、充実した職業人生を送っている頃に大きな病をいくつか経験し、今に至るといふ共通点の多いものであった。そのキーワードは「出会い」と言ってもいい。キリストとの出会い、心理学との出会い、病との出会い、人との出会い、その中で生かされていることを異口同音に語られた。

お二人の話が終わったところで、演者同士がお互いに質問をし合い、フロアーからの質問に答える時間となった。聴衆は中高年の方が多かったせいか、お二人の話に共感され、ご自身がご病気に

なられた経験や両親をみとった経験を語られる方もいらした。

その中で、いくつか印象に残ったお二人の言葉を書き留めておく。「病の真ただ中にいた時には、神なんて思い出もしなかった。でも今は大きな力に導かれていると思う」、恩師との出会いのコツを聞かれて「私は飢えていた。飢えていたから与えられたのだと思う。そして自分が望んでいた以上のものが与えられた」（瀧口先生）。「病気やトラブルに見舞われたときに、神に抗議することも用意された道である」「人に助けられる経験を味わいたい」（藤掛先生）。フロアーの思いに、お二人は心を尽くして言葉をかけておられた。

瀧口先生は講演の冒頭に、ご自身が講演するたびにそれは自分の遺言だと思って語っていると言われ、最後は「神は追えないような重荷は負わせない。それが負えなくなったときは天国に行くとき」と締めくくられた。臨床心理士としては誰もが知る大家であられるにもかかわらず、謙遜で飾らない語り口で、ご自身の人生を全うしようとしているお姿に、同じ臨床家として心を新たにされる思いであった。



左：藤掛明先生 右：瀧口俊子先生

（報告者：村上純子 [むらかみ・じゅんこ] 聖学院大学心理福祉学部心理福祉学科教授）